

四語書いたら五語削ろう

森 田 孟

昔から学生の英語論文は、しばしば "and, but, therefore" 論となって先生たちを泣かせてきた。何しろ論文とは、「論」でなくてはならず、論理で読ませるものだ。「そして」「そして」と繋いでゆき、そうしているうちに生じうる筈の反論や異論を適宜抑えるべく「しかし」「けれども」と気を配りながら、「それ故に」こうこうだ、と、まあ、これで「論」文に、というわけだろう。その心、誠に涙ぐましく察するに余りある。

だが、文は並べてゆけば大抵は "and" で繋がっているものであり、"but" や "however" などそうそう使わずとも文章はしかるべく書き進められる。"therefore" を幾ら畳み重ねても、それだけでは文章は「それ故に」にはならないのである。「それ故に」なる語をどれほど繰り返してみせても内容が一向に「それ故に」にならなければ、これは滑稽だ。

英文のみに限らない。日本語の文章でも古来名文と謳われるものには接続詞が甚だ少ない。繋辞は文章全体を弛ませ濁らせるのである。名文とは、単純、明快、澄み切っていて、それでいて味わい深く、筆者の論旨と心情が読者の頭と心にすっきり、ずっしり、深々と、余韻豊かに届いて、感動を後に長く残すものを言う。

文意は正確に伝えて読者を説得しなければならないというわけだろう、やたらに「つまり」「つまり」と言い換えては進める文章に出くわすことも少なくないが、そんなに詰まればかりいてどうするのか。それほど言い換えが必要だとすれば、それは筆者の頭の整頓が不十分なのであり、言い換えなければ理解されない不安があるなら、言い換えずともすむ表現を初めから考えればよく、「つまり」の前の文章は不要だろう。換言によって論旨を一層正確にし強調したいのなら、その文章をただ重ねればよく、「つまり」なる馬鹿気た繋辞は削除するがよい。糞詰まり文章は御願いたい。

前置きなども、以ての外である。文章は須らくずばり本文から始めるべきものである。ただらと前置きなど読まされてはかなわない。たとえその論全体にとって必須の「前置き」でも、前置きなどと感じさせないように本文の中に巧妙に溶け込ませておきたい。

次に何々について述べよう、論じよう式の、予告のつなぎ文句をいちいち付加しながら書き継いでゆく態のものも、実に不愉快だ。そのような予告をされずとも、次に何が論じられ述べられているかは、先を読み進めれば読者には分る筈だ。次に何が書かれているか読者に分るように書けない不適切な筆者に限って、予告の繫辞を連発する。新聞小説ではないのだ。予告なしで先を読み継がせられる文章でありたい。

「ところで」と「さて」が出てくるような文章は読みたくないものだ。これらの接続詞は、これから脱線するという予告のようなものであり、これまでが脱線だったことを示す証拠なのだから。脱線しているような文章を人に読ませるのは不埒ではないか。周到に計算された技巧としての脱線なら、「脱線」などと感じさせることは決してないだろう。

小学生向けの読み物や新聞記事ではあるまいに、学術論文の筈のものにどういうわけか、小見出しをこちょこちょ付けたものが特に近年目立つようになったのも異な現象で、見苦しい。小見出しによって親しみ深さや読み易い印象を与えようとでもする気かしら。名文は全て読み易く親しみ深いものだが、尤もらしい小見出し如きで文章が名文になるなら世話はない。とりわけ、「はじめに」と「おわりに」なる小見出しには笑わせられる。文章に限らず何でも、始まりの箇処は「はじめに」に決っており、終りの部分は「おわりに」が当たり前だろう。余りにも分かり切った小見出しなど堂々と付けて、それによって一、二行分取って文章全体の分量を増やそうとは浅ましい限りだ。まともな文章には句読点一つ余分なものはあってはならない。

調べたこと、知った事柄、考えたことなど全てを悉く詰め込み表出した、水上に浮かぶピンポン玉のような文章には、同情は禁じ得ないが、これは改めて全体を書き直すことが必要だ。優れた文章が書けるか否かは、自分が十分に書ける内容を、書けるにも拘わらずどれだけ厳選し、どれほど割愛できるか、どのくらい言外に潜められるか、にかかっている。ナ

ルシストに名文は書けない。優れた文章は氷山なのであり、多くのものが敢えて削除されて水面下に沈められている。

その昔、近代批評の先駆者と讃えられるフランスの詩人・批評家ニコラ・ボワロー (Nicolas Boileau, 1636-1711) は、その名著の一冊『詩法』*Art poétique* (1674年刊) で勧めたものだ。

Hâtez-vous lentement; et, sans perdre courage,
Vingt fois sur le métier remettez votre ouvrage:
Polissez-le sans cesse et le repolissez;

Ajoutez quelquefois, et souvent effacez. (第1章、171-74行)
(ゆっくり急ぎなさい、そして、くじけることなく、／二十回は制作中の作品を見直しなさい。／絶えず磨きをかけて、更にそれを磨き直すのです。／時々加筆しては、しばしば削除しなさい。)

学生時代に知って以来、拳拳服膺、折り折り口を突いて出てくる私の得意の？暗唱句の一つだが、執筆中の自作を二十度見直すには並々ならぬ勇気がある。ボワローの更に850年前には、中唐の詩人賈島 (779-843) がロバの背に揺られながら、自作詩の一句「僧は推す月下の門」の「推す」を「敲く」にすべきか否か苦心惨憺していて、通行中の首都の長官韓愈の行列に突っ込み、彼から「敲く」を薦められてそれに決定したという有名な挿話を残した。優れた文章を書くには、見るべき論文をものするには、一に推敲、二に推敲、三、四が無くて五に推敲、ということになろうか。

先刻のボワローは、別の名作『諷刺詩』*Satire*, II の 52行目で、"Si j'écris quatre mots, j'en effacerai trois." (私は四語書いたら、そのうちの三語は消すだろう) とも言った。ボワローならぬ我々は、四語書いたら五語削除しなくてはなるまい。え！四語しかないのに五語は消せないだろうって？ そんなことを言っているようでは、まだまだまともな文章は書けないだろう。文芸作品を扱う論文は、理路整然たる論であると同時に、それ自体が一篇の文芸作品でもありたいものである。

(成城大学大学院文学研究科教授・アメリカ文学)